

絶滅 (EX)

ニホンオオカミ

食肉目 イヌ科

Canis lupus hodophilax Temminck, 1839

環境省 絶滅

- ❖ 形態 頭胴長 95～114cm、尾長 30cm、耳長 80～81mm、頭骨全長 186～235mm。体毛は長くベージュ色で、首、背、体側、尾の毛は先端が僅かに黒い。上下唇と頬は白色に近い。イヌに似るが、裂肉歯が大きい。オオカミの中でも小型であり、特に四肢と耳が短い。
- ❖ 分布の概要 ニホンオオカミは 19 世紀まで本州以南に広く分布していたが、1905 年（明治 38 年）に奈良県吉野郡小川村鷲家口での捕獲を最後に生息情報が途絶えている。岩手県には江戸末期まで広く生息していたが、明治 20 年代に絶滅したと推定されている。
- ❖ 脅威 ニホンオオカミの絶滅の原因については不明な点が多い。エゾオオカミでは重要な餌源であるエゾシカが狩猟によって個体数を減少させたことや、家畜の被害を防止する目的で駆除が推奨され個体数を減少させていった。盛岡藩雑書には馬が食い殺されるなどの家畜被害が記してあり、駆除が行われていることから、同様の個体数の減少が起こった可能性は高い。また 1732 年（享保 17 年）年頃に狂犬病が海外から侵入して死亡率が高まったことや、人間にも危害が及ぶようになって捕殺が進められ、絶滅に追い込まれたと思われる。
- ❖ 特記事項 日本固有種。明治 14 年に岩手県で捕獲されたメスの剥製標本が、東京大学農学部に保管されている。
- ❖ 文献 1. ブレット・ウォーカー（浜健二 訳）（2009）、2. 遠藤公男（1994）、3. 今泉吉典（1960）

（山内 貴義）

絶滅 (EX)

ニホンカワウソ

食肉目 イタチ科

Lutra lutra nippon Imaizumi and Yoshiyuki, 1989

環境省 絶滅（本州以南亜種）

- ❖ 形態 頭胴長 64.5～82cm、尾長 39～48.9cm、体重 4.2～11.5kg。背中は茶色、腹は淡白色褐色。手足は短く、四肢の指に水かきがあり、尾が太く円錐形をしている。
- ❖ 分布の概要 かつて北海道から九州まで全国の水辺に広く分布していたと考えられる。岩手県内では、1944 年に葛巻町の馬淵川で親子 3 頭が目撃されて以来情報はない。2012 年に環境省はそれまでの絶滅危惧 I A 類から絶滅種に変更した。
- ❖ 脅威 第二次世界大戦まで、本種の毛皮に対する需要が大きく、そのため狩猟により大幅に減少した。その後、水質汚染による餌動物の減少や護岸工事などの河川改修によるねぐら、繁殖場所（土穴が必要とされる）の喪失も絶滅の原因と考えられる。
- ❖ 特記事項 1928 年に狩猟対象から除かれ、捕獲禁止になり、1964 年に国の天然記念物、翌 65 年に特別天然記念物に指定された。環境省は 2012 年に全国で絶滅に変更した。
- ❖ 文献 2. 遠藤公男（1994）、3. 今泉吉典（1960）、4. 安藤元一（2008）、5. 遠藤公男（1987）、6. 環境省（2014）

（山内 貴義）

ホンドザル

霊長目 オナガザル科

Macaca fuscata fuscata Gray, 1870環境省 絶滅のおそれのある地域個体群
(北奥羽・北上山系のホンドザル)

- ❖ 形態 雄は頭胴長 53～60cm、尾長 8～12cm、体重 10～18kg。雌は頭胴長 47～55cm、尾長 7～10cm、体重 8～16kg。体毛は茶褐色ないし灰褐色で、腹と手足の内側がやや白い。顔と尻は裸出して赤い。
- ❖ 分布の概要 ホンドザルは日本固有種のニホンザル *Macaca fuscata* の亜種であり、本州や四国、九州に分布する。北上高地の五葉山から三陸地域を中心として群れが分布する小規模個体群であるが、環境省の分布調査ではハナレザルが県内に広く生息していることが確認されている。
- ❖ 生息状況 1990 年代以前までは 3～5 群で 40～100 頭と推定されている。2014 年の報告では 4 群で 90 頭であり変化は見られていない。2022 年の報告では 4 群で 115 頭であったが、ボイストラップ調査を併用すると新たな群れの可能性も指摘されており、2014 年よりも分布域が広がり、頭数も増加している。ミトコンドリア DNA 等の遺伝学的調査によって、地理的に孤立していながら個体群の遺伝的変異性は低くないことが明らかとなっている。また近隣の東北地域の個体群とは別の独自性をもった進化的背景であることが示された。以上のことを勘案すると、北上高地に生息する本種は保全上貴重な個体群であるといえる。
- ❖ 脅威 一部の群れやハナレザルでは農作物被害が発生している。安定的な生存基盤としては不十分と考えられる。
- ❖ 特記事項 日本固有種。
- ❖ 文献 7. Enari *et al.* (2019)、8. 岩手県沿岸広域振興局 (2022)、9. 環境省 (2004)、10. 大井徹 (1997a)、11. 大井徹 (1997b)、12. 大井徹・増井憲一 (2002)、13. 宇野壮春ほか (2022)、14. 川本芳ほか (2022)

(山内 貴義)

ヤマコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Nyctalus aviator Thomas, 1911

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 前腕長 56～66mm、体重 31～59g 体毛は光沢のある茶色が目立つ。日本の食虫性コウモリの中では最大で翼を広げると 40cm に達する。翼は狭長型。
- ❖ 分布の概要 県内では二戸市、宮古市、岩泉町、薬師岳、旧川井村、盛岡市、紫波町、八幡平市、岩手山・八幡平地域、雫石町・国見山、北上市、旧水沢市、一関市 で確認されている。
- ❖ 生息状況 広い広葉樹林を好み、ミズナラ、ブナなどの大木をねぐらにするが、時には町中の神社、寺、公園などの大木の樹洞をねぐらにすることもある。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある大径木を含む広葉樹林、森林伐採により消失してしまうこと、大径木のある社寺林、屋敷林の減少。高空を飛翔し長距離の移動する事から、風車によるバットストライクのリスクが特に高い種と言える。
- ❖ 特記事項 既知生息地が消失している一方、10 年以上新しい生息確認例が確認されていない種である。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男 (1980)、16. 藤井忠志 (1995)、17. 前田喜四雄 (1973)、18. 日本野生生物研究センター (1991)、19. Yoshiyuki (1989)、20. 作山宗樹 (2007)

(峰下 耕)

コヤマコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Nyctalus furvus Imaizumi and Yoshiyuki, 1968

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 前腕長 48~53mm、体毛は暗褐色。形態、体色ともに酷似しているヤマコウモリと比べると体毛の色はかなり黒味が強い、また前腕長、体重ともに明らかに小さい。
- ❖ 分布の概要 県内では二戸市、宮古市、岩泉町、早池峰山、住田町、旧玉山村で確認されている。
- ❖ 生息状況 全国的にも希少であり、県内においても確認は極めて少ない。採集地の大半が大木の多い自然広葉樹林であることから樹洞をねぐらとすると考えられ、本種には大径木を含む広葉樹林の存在が必須である。繁殖、冬眠については不明。
- ❖ 脅威 今回の調査でも生息確認できなかったが、生息していないとは断定できない。同族のヤマコウモリと同様に高空を飛翔し長距離の移動するものと考えられることから、風車によるバットストライクのリスクが大きい種と言える。
- ❖ 特記事項 繁殖、冬眠場としての大径木を含む樹木が、森林伐採により消失してしまうこと。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男 (1980)、19. Yoshiyuki (1989)、21. Corbet, Hill (1986)、22. 今泉吉典・遠藤公男 (1959)

(峰下 耕)

モリアブラコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Pipistrellus endoi Imaizumi, 1959

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 前腕長 30~34mm、体毛は背面に赤褐色または黄褐色、皮膜の色は黒い、犬歯後方の突起はアブラコウモリより大きく発達している。
- ❖ 分布の概要 県内では九戸村、旧山形村、山田町、宮古市、岩泉町、遠野市、早池峰山、旧玉山村、旧安代町、葛巻町で確認されている。
- ❖ 生息状況 全国的にも希少であり、県内においても確認は少ない。採集地の大半が大木の多い自然広葉樹林であり、樹洞や樹皮下などをねぐらとする本種には樹林の存在が必須。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある樹木が、森林伐採により消失してしまうこと。広葉樹林の適切な面積保全、採餌場としての樹林の連続性の維持が必要である。樹林に隣接した風車によるバットストライクの影響が懸念される。
- ❖ 特記事項 日本固有種であり、クロホオヒゲコウモリとともに岩手県で初めて発見された。遠藤公男が旧安代町において採集し、1959年、今泉吉典がモリアブラコウモリとして新種記載した。学名の *endoi* は遠藤に因む。今回の調査では未確認種である。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男 (1980)、19. Yoshiyuki (1989)、23. 遠藤公男 (1973)、24. Imaizumi (1959)、25. 小野泰正・関山房兵 (1986)、26. 横山恵一 (1997)

(峰下 耕)

チチブコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Barbastella pacifica Kruskop, Kawai and Tiunov, 2019環境省 絶滅のおそれのある地域個体群
(本州のチチブコウモリ)

- ❖ 形態 前腕長 39～43mm、体毛は黒色、耳介は大きく幅広で左右の根元が頭部中央で結合する。
- ❖ 分布の概要 県内では二戸市・折爪岳、久慈市、山田町、宮古市、岩泉町、釜石市、旧玉山村で確認されている。
- ❖ 生息状況 本州での確認事例も少なく、県内での確認も極めて少ない。確認されているのが原生林であることから主に樹洞をねぐらとしていていると考えられる。繁殖については不明。岩泉町の洞窟で冬眠個体、秋季に久慈市の洞窟で休息中の個体が確認されている。
- ❖ 脅威 ねぐら、採餌場である大径木を含む樹林の伐採による消失。広葉樹林の適切な面積保全、樹林の連続性の維持が必要である。樹林に隣接した風車によるバットストライクの影響が懸念される。
- ❖ 特記事項 近年では日本列島に生息する個体は固有種として提唱されている。今回の調査で生息確認数が特に少ない種である。
- ❖ 文献 19. Yoshiyuki (1989)、22. 今泉吉典・遠藤公男 (1959)、27. 内田照章・安藤光一 (1972)
(峰下 耕)

クロホオヒゲコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Myotis pruinus Yoshiyuki, 1971

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 前腕長 30～35mm、体重 3～7 g、日本産ホオヒゲコウモリ属のなかで最小。体毛は黒色で背面上毛の先端に銀色の金属光沢をもつ。
- ❖ 分布の概要 県内では山田町、宮古市、岩泉町、早池峰山、旧安代町、和賀町、奥州市、一関市、西和賀町で確認されている。
- ❖ 生息状況 採集地の大半が大木の多い自然広葉樹林であり、樹洞や樹皮下などをねぐらとする本種には広葉樹林の存在が必須である。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある樹木が、森林伐採により消失してしまうこと。広葉樹林の適切な面積保全、採餌場としての樹林の連続性の維持が必要である。樹林に隣接した風車によるバットストライクの影響が懸念される。
- ❖ 特記事項 日本固有種であり、1969年に遠藤公男により岩手県和賀町において初めて採集され、1971年、吉行瑞子によって新種として記載された。今回の調査では限られた広葉樹林でのみ採取された、生息確認数が特に少ない種である。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男 (1980)、25. 小野泰正・関山房兵 (1986)、28. 遠藤公男 (1976)、29. Yoshiyuki (1971)、30. 北上市 (2015)
(峰下 耕)

ミズラモグラ

トガリネズミ形目 モグラ科

Euroscaptor mizura (Günther, 1880)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 頭胴長 77～106 mm、尾長 20～25mm。ヒミズよりやや大きく、手は大きく発達している。耳介を欠く。毛色は灰褐色から黒い色まで地域変異が見られる。
- ❖ 分布の概要 生息情報は極めて少ない。岩手県内では一戸町西岳、五葉山、早池峰岳、薬師岳、西和賀町、住田町、宮古市、花巻市で確認されているだけである。
- ❖ 生息状況 生息数は少ないと考えられる。他県での捕獲記録も少ない。
- ❖ 脅威 土壌動物を食物としているので、落葉層の発達した落葉広葉樹林の保全が必要である。
- ❖ 特記事項 西岳標本は青森県三戸高校に、西和賀町標本は岩手大学に保管されている。
- ❖ 文献 3. 今泉吉典 (1960)、31. 関山房兵 (1982)

(山内 貴義)

ニホンウサギコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Plecotus sacrimontis G.M. Allen, 1908

環境省 なし

- ❖ 形態 前腕長 37～44mm、体重 6～11g、体毛の背面は薄茶色、腹面は僅かに淡い。耳介 38～40mm 耳珠、約 19mm とともに著しくながい。翼は広短型。
- ❖ 分布の概要 県内では二戸市、旧山形村、山田町、宮古市、岩泉町、旧川井村、遠野市、住田町、旧玉山村、旧安代町、岩手山・八幡平地域、一関市で確認されている。
- ❖ 生息状況 森林地帯での捕獲が多いことから、樹洞を主なねぐらだが、家屋、石室、洞窟などをねぐらとすることも稀ではない。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある樹木が、森林伐採により消失してしまうこと。広葉樹林の適切な面積保全、樹林の連続性の維持に加え、人工環境に依存した場合には、糞尿汚染、寄生虫等の衛生面で人との軋轢が生じ、排除されることが危惧される。
- ❖ 特記事項 1972 年、我が国で初めて発見された遠野市の繁殖集団は、鍾乳洞に形成され、遠野市では、昭和 63 年に本種の繁殖洞を市の天然記念物に指定した。県内では近年において新しい生息確認例は見られていない。
- ❖ 文献 18. 日本野生生物研究センター (1991)、19. Yoshiyuki (1989)、32. 横山恵一 (1985)、33. 横山恵一 (1992)

(峰下 耕)

ヒナコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Vespertilio sinensis (Peters, 1880)

環境省 なし

- ❖ 形態 前腕長 43～53mm、体毛は黒褐色に先端が白い刺毛が混在し霜降り状に見える。翼は狭長型。翼は狭長型。
- ❖ 分布の概要 県内では宮古市、岩泉町、旧大迫町、遠野市、旧玉山村、旧安代町、盛岡市、旧水沢市、和賀町、西和賀町で確認されている。
- ❖ 生息状況 本来のねぐらである樹洞が森林伐採で減少したため、神社や寺の屋根裏、陸橋、新幹線の橋脚の隙間を利用するようになった。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある樹木が、森林伐採により消失してしまうこと。広葉樹林の適切な面積保全に加え、人工環境に依存した場合には、糞尿汚染、寄生虫等の衛生面で人との軋轢が生じ、排除されることが多い。コウモリ用巣箱、コウモリ小舎などを設置し、問題の起こらない場所にねぐらを誘導する必要がある。高空を飛翔し長距離の移動する事から、風車によるバットストライクのリスクが特に高い種である。
- ❖ 特記事項 既知生息地が人工物であるため、生息地の持続が不安定である。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男 (1980)、34. 遠藤公男 (1971)、35. Funakoshi, Uchida (1981)、36. 向山満 (2000)、37. 作山宗樹 (2007)、38. 北上市 (2015)

(峰下 耕)

ノレンコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Myotis bombinus Thomas, 1906

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 前腕長 38～42mm、体重 6～10g、体毛は背面灰色、腹面は白っぽい、他のホオヒゲコウモリ類より耳株は長く 9 mm 以上あり、尾膜の後縁の尾端周辺に細い毛が列生している。
- ❖ 分布の概要 県内では旧山形村、岩泉町、旧玉山村、旧安代町、岩手山、早池峰山で確認されている。
- ❖ 生息状況 主に自然洞窟をねぐらとするが、廃トンネルや防空壕、神社の社、稀に樹洞などでも確認されている。
- ❖ 脅威 ねぐら、採餌場としての樹林が森林伐採により消失してしまうことに加え、主なねぐらである洞窟の環境破壊が懸念される。樹林に隣接した風車によるバットストライクの影響が懸念される。
- ❖ 特記事項 近年の DNA 解析によりヨーロッパ産の近縁種とは明瞭に区別されている。
- ❖ 文献 19. Yoshiyuki (1989)、39. 向山満 (2000)、40. 内田照章・庫本 正 (1968)

(峰下 耕)

カグヤコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Myotis longicaudatus Ognev, 1927

環境省 なし

- ❖ 形態 前腕著 35～41mm、体重 6～11g、体毛は赤褐色。形態、体色ともに似ているヒメホオヒゲコウモリよりも足が長く、下腿長は 17mm 以上ある。
- ❖ 分布の概要 県内では旧山形村、宮古市、岩泉町、薬師岳、旧玉山村、旧安代町、和賀町、西和賀町、岩手山・八幡平地域で確認されている。
- ❖ 生息状況 樹洞をねぐらとするが、時々洞穴で休眠したり、100 頭ほどの繁殖集団が人家で発見されたこともある。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある樹木が、森林伐採により消失してしまうこと。広葉樹林の適切な面積保全、樹林の連続性の維持が必要である。樹林に隣接した風車によるバットストライクの影響が懸念される。
- ❖ 特記事項 生息確認数が特に少ない種である。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男 (1980)、18. 日本野生生物研究センター (1991)、19. Yoshiyuki (1989)、41. 今泉吉典 (1970)

(峰下 耕)

ユビナガコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

環境省 なし

- ❖ 形態 前腕長 44～51mm、体重 10～18g、体毛は焦げ茶色で短くビロード状、第三指（中指）が長く、高速飛翔に適した狭長型の翼をもつ。
- ❖ 分布の概要 県内では北上市の洞窟内で確認されているほか、新たに盛岡市内の水路トンネル内に千頭ほどの越冬コロニーが確認された。
- ❖ 生息状況 主に自然洞窟をねぐらとするが廃トンネルや防空壕などでの休息も確認されている、県内で夏期のコロニーは以前に利用されていた人工洞の修復工事以降、10 年ほど確認されていない。
- ❖ 脅威 採餌場となる樹林および草原の適切な面積保全にくわえ、ねぐらとなる洞穴の環境破壊が最も懸念される。生息している洞穴が発見された場合、立ち入りを制限すべきである。九州では 2 万頭からなる冬眠集団が、洞穴の観光開発によって消滅した例もある。県内では近年、何カ所かの人工洞において季節によっては生息確認例が新たに分ってきたが、個体数は少ない。
- ❖ 特記事項 長距離移動する事から風車によるバットストライクのリスクが高いと考えられる。
- ❖ 文献 19. Yoshiyuki M (1989)、42. 船越公威・内田照章 (1975)、43. 庫本正 (1972)、44. 内田照章 (1985)、45. 横山恵一ほか (1975)

(峰下 耕)

テングコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Murina hilgendorfi (Peters, 1880)

環境省 なし

- ❖ 形態 前腕長 40～46mm、体重 8～15g、体毛は灰褐色で先端に銀色の光沢を持ち、この体毛は尾膜まで及ぶ、鼻部は筒状でやや外側に突出している、翼は広短型。
- ❖ 分布の概要 県内では旧山形村、山田町、宮古市、岩泉町、遠野市、陸前高田市、旧玉山村、旧安代町、岩手山・八幡平地域で確認されている。
- ❖ 生息状況 主に森林の樹洞をねぐらにするが、洞穴で休眠することもある。その際、洞内の天井にあいた隙間、小孔に単独で潜んでいることが多い。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある樹木が、森林伐採により消失してしまうこと、休眠に適した洞窟の観光開発による消失。樹林の適切な面積保全が必要である。樹林に隣接した風車によるバットストライクの影響が懸念される。
- ❖ 特記事項 県内では近年において新しい生息確認例がほとんどない。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男 (1980)、18. 日本野生生物研究センター (1991)、19. Yoshiyuki (1989)、30. 北上市 (2015)、46. 庫本正・内田照章 (1981)、47. Yokoyama (1996)

(峰下 耕)

ホンドオコジョ

食肉目 イタチ科

Mustela erminea nippon Cabrera, 1913

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 雄の頭胴長は 182～198mm、雌は 140～170mm。雄の尾長は 48～67mm、雌は 54～61mm とイイズナの倍近く、先端部が黒い。夏毛は背面が濃い褐色で腹面は白色であり、冬毛は全身白くなるが、尾の先端部は冬でも黒い。
- ❖ 分布の概要 本州北部に生息し、岩手県では、早池峰山（岩手大学で保管）、薬師岳、五葉山、岩泉町、八幡平市、二戸市、葛巻町、宮古市、花巻市、遠野市、大槌町、山田町などに生息が確認されている。また標高が高く、比較的岩場が多い地域に生息している。しかし分布域は狭いと考えられる。
- ❖ 生息状況 北上高地、奥羽山地の標高の高い、限られた地域に生息する。
- ❖ 脅威 温暖化、さらにはシカの高標高域への分布拡大による生息環境の改変が考えられる。
- ❖ 特記事項
- ❖ 文献 3. 今泉吉典 (1960)、48. 増田戾樹 (1996)、49. 野柴木洋 (1995)

(山内 貴義)

ニホンイイズナ

食肉目 イタチ科

Mustela nivalis namiyei Kuroda, 1921

環境省 準絶滅危惧 (本州亜種)

- ❖ 形態 雄の頭胴長は 145～1820mm、雌は 112～200mm、雄の尾長は 19～27mm、雌は 21～32mm。食肉目の中では最少の種である。夏毛の背面は茶褐色で腹面は白色であり、冬毛は全身白色になる。オコジョ (*M. erminea*) に似ているが、さらに小型で、夏毛、冬毛とも尾の先端が黒くならない点で区別できる。
- ❖ 分布の概要 目撃・捕獲記録はあまり多くなく、青森県では時々報告がある。岩手県内では北上高地、奥羽山脈とも生息し、一戸町、二戸市、久慈市、岩泉町、葛巻町、大槌町、遠野市、滝沢市、八幡平市、花巻市で確認されている。
- ❖ 生息状況 確認例が非常に少ないが、北上山地、奥羽山地の低山や山麓に生息している。
- ❖ 脅威 低山山麓を主たる生息域とするので、交通事故や森林伐採による生息地の破壊が懸念される。
- ❖ 特記事項 日本固有種。
- ❖ 文献 3. 今泉吉典 (1960)、48. 増田戾樹 (1996)、50. 小原良孝 (1991)

(山内 貴義)

ニホンモモンガ

齧歯目 リス科

Pteromys momonga Temminck, 1844

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胴長 140～200mm、尾長 100～140mm の樹上性小哺乳類。毛色は背面が夏毛で茶褐色であり、冬毛は灰褐色である。腹面は夏冬とも白色。前肢と後肢の間に滑空用の被膜がある。
- ❖ 分布の概要 岩手県では奥羽山地、北上高地ともに生息している。二戸市、一戸町、八幡平市、葛巻町、宮古市、山田町、遠野市、住田町で確認されている。標高のやや高い地域を中心として生息するが、目撃例は多くない。
- ❖ 生息状況 夜行性でかつ樹洞を休息と繁殖場所として使用するため、生息確認が難しい。捕獲記録、生息情報とも少なく、個体数は少ないと推測される。
- ❖ 脅威 安定した生息には一頭当たり複数の樹洞の存在が不可欠である。
- ❖ 特記事項 日本固有種。
- ❖ 文献 51. 山口祐司・柳川久 (1995)

(山内 貴義)

ヤマネ

齧歯目 ヤマネ科

Glirulus japonicus (Schinz, 1845)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胴長 67.5～84mm、尾長 44～54mm、体重は活動期 14～20 g、冬眠期には 2 倍程度まで増加する。背面の毛色は淡褐色であり、腹面はより淡く、目の回りは黒褐色である。背中の正中線にそって黒褐色の太い線が一本ある。
- ❖ 分布の概要 岩手県では奥羽山脈、北上高地に跨がって生息する。二戸市、八幡平市、葛巻町、盛岡市、岩泉町、宮古市、遠野市、花巻市で確認されている。ブナ林やミズナラ林に比較的多いが、高標高地にも生息する。
- ❖ 生息状況 夜行性のため目撃例は少ないが、県内比較的広い範囲で生息していると考えられる。里地のコナラ林や、農家の納屋などから冬眠中の個体が保護されることもある。
- ❖ 脅威 営巣場所や餌場として老木を含む豊かな広葉樹林の保全が重要である。
- ❖ 特記事項 日本固有種で、1 属 1 種。国の天然記念物。
- ❖ 文献 3. 今泉吉典 (1960)、52. 湊秋作 (2000)、53. 中島福男 (1996)

(山内 貴義)

ヒメホオヒゲコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Myotis ikonnikovi Ognev, 1912

環境省 なし

- ❖ 形態 前腕長 31～37mm、体重 4～8 g、体毛は黒褐色から赤褐色、皮膜は黒褐色。形態、体色ともに似ているカグヤコウモリよりも小さく、下腿長は 17mm 以下と短い。
- ❖ 分布の概要 県内では宮古市、五葉山、遠野市、薬師岳、旧玉山村、岩手山・八幡平地域、旧安代町、旧湯田町で確認されている。
- ❖ 生息状況 県内では標高 500m 以上のミズナラ、ブナ帯の森林に多く生息。主に樹洞や樹皮下をねぐらとするが、稀に洞窟を利用することもある。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹洞のある樹木が、森林伐採により消失してしまうこと。広葉樹林の適切な面積保全、樹林の連続性の維持が必要である。樹林に隣接した風車によるバットストライクの影響が懸念される。
- ❖ 特記事項 北海道産をエゾホオヒゲコウモリ (*M. yesoensis*)、本州産をシナノホオヒゲコウモリ (*M. hosonoi*)、フジホオヒゲコウモリ (*M. fujiensis*)、およびオゼホオヒゲコウモリ (*M. ozensis*) などに分け、各々を別種としてあつかう考え方 (Yoshiyuki, 1989) にもとづき、県内のものをフジホオヒゲコウモリ (*M. fujiensis*) と記載した。県内の広い森林環境であれば各地で生息確認されている。
- ❖ 文献 3. 今泉吉典 (1960)、15. 遠藤公男 (1980)、18. 日本野生生物研究センター (1991)、19. Yoshiyuki (1989)、47. Yokoyama (1996)、54. 吉行端子 (1968)、55. 北上市 (2015)

(峰下 耕)

ニホンカワネズミ

トガリネズミ形目 トガリネズミ科

Chimarrogale platycephalus (Temminck, 1842)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胴長 103～133mm、尾長 94～105mm。体重 24～56g。手足の指の両側に水掻きの役割をする白く扁平な剛毛が密生している。耳介は小さく、柔らかくて密な毛の中に隠れている。
- ❖ 分布の概要 岩手県内では二戸市、八幡平市、葛巻町、雫石町、滝沢市、宮古市、岩泉町、花巻市、住田町、遠野市、一関市、山田町、大槌町で確認されている。県内の山間溪流を中心として分布している。
- ❖ 生息状況 県内の溪流、小川を中心として広範に生息しており、各地で釣り人などによって目撃されるが、生息密度は高くないと考えられる。
- ❖ 脅威 砂防ダムや護岸工事などの河川改修による生息環境の悪化。
- ❖ 特記事項 日本固有種。
- ❖ 文献 3. 今泉吉典（1960）、56. 阿部永監修（2008）、57. 北垣憲仁（1996a）、58. 北垣憲仁（1996b）

(山内 貴義)

コテングコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

Murina ussuriensis Ognev, 1913

環境省 なし

- ❖ 形態 前腕長 28～36mm、体重 4～9 g、体毛は薄茶色から黄土色、この体毛は尾膜まで及ぶ、鼻部は筒状でやや外側に突出している、翼は広短型。
- ❖ 分布の概要 県内では二戸町、旧山形村、山田町、宮古市、大槌町、釜石市、岩泉町、旧川井村、旧大迫町、旧玉山村、盛岡市、岩手山・八幡平地域、旧安代町、和賀町で確認されている。
- ❖ 生息状況 広葉樹林の樹洞、樹皮下や枯れ葉などをねぐらとし低木林から高木林と樹林内の環境を広く利用している。
- ❖ 脅威 繁殖、冬眠場としての樹林が、森林伐採により消失してしまうこと。広葉樹林の適切な面積保全、樹林の連続性の維持が必要である。
- ❖ 特記事項 生息確認例が多くなったが削除とまでは断定できない。
- ❖ 文献 15. 遠藤公男（1980）、18. 日本野生生物研究センター（1991）、19. Yoshiyuki（1989）、59. 北上市（2015）

(峰下 耕)

ニホンツキノワグマ

食肉目 クマ科

Ursus thibetanus japonicus Schlegel, 1857

環境省 なし

- ❖ 形態 本州最大の哺乳類であり、成獣では頭胴長が 110～130cm、体重が 40～130kg（雄平均 70kg，雌平均 60kg）に達する。全身黒色で胸に三日月模様があるが、無い個体も見られる。
- ❖ 分布の概要 岩手県内では奥羽山地と北上山地にまたがってほぼ全域に分布している。
- ❖ 生息状況 県内では山地から低平野部の里山まで広く生息している。農作物や造林木に被害がみられ、人身被害も岩手県では毎年多く発生している。2012 年に発表された生息数は、ヘア・トラップ法による推定で 3,400 頭（中央値）であった。2020 年に発表されたヘア・トラップ法による推定では 3,700 頭（中央値）であり、やや微増していたが、地域によっては有害捕獲が毎年行われて密度が減少したところも見られている。
- ❖ 脅威 現状では特段危機的な状況はない。しかし繁殖力はそれほど高くないこと、また広葉樹林の減少によって生息域縮小や餌資源の減少が考えられる。数年に一度の割合で多くの個体が人里に出没する現象が見られ、有害捕獲数が多くなっており、急激な生息数の減少も危惧される。
- ❖ 特記事項 優れた自然環境の指標となる種である。
- ❖ 文献 60. 岩手県自然保護課（2017）、61. 岩手県自然保護課（2022）、62. 羽澄敏裕（1996）、63. 山内貴義・齊藤正恵（2008）

（山内 貴義）

ニホンカモシカ

偶蹄目 ウシ科

Capricornis crispus (Temminck, 1836)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胴長 70～85cm、体重 30～50kg。大型の草食獣。角は落ちず、毎年角輪を形成する。
- ❖ 分布の概要 都市部を除く県内の山地、里地のほぼ全域に分布。
- ❖ 生息状況 生息数はほぼ安定していると思われる。三陸地方の一部市町では、農作物被害の防除のため東日本大震災前は特定鳥獣保護管理計画に則って捕獲も行われていた。
- ❖ 脅威 感染症パラボックスの流行など。ニホンジカの個体数や分布息が増加している地域では、カモシカの分布息が減少しているとの情報もある。
- ❖ 特記事項 日本固有種。国の特別天然記念物。優れた自然環境の指標となる種である。
- ❖ 文献 56. 阿部永監修（2008）、64. 岸本良輔（1996）

（山内 貴義）